

## 8 名古屋市美術館

### 常設展と普段のアウトリーチ活動

#### 1. 美術館の概要

- 開館年: 1988年  
運営母体: 名古屋市  
都市人口: 217万人
- 延床面積: 7,232㎡  
展示室面積: 2,360㎡  
開館時間: 9:30 ~ 17:00  
休館日: 月曜、年末年始
- 運営スタッフ総数: 20名  
(非常勤含)  
学芸員数: 9名  
教育普及担当者数: 1名  
(学芸員数、教育普及担当者数は内数)
- 所在地・連絡先:  
〒460-0008 名古屋市中区栄2-17-25  
tel. 052-212-0001  
fax. 052-212-0006  
URL: <http://www.art-museum.city.nagoya.jp/>

#### 2. 美術館の特色、事業概要

- 「文化の香り高いまち名古屋」の実現の一翼を担い、訪れる人たちが実作に触れることによって感受性を培い、さらに知識や創造性を豊かにし、現代文化の多様性を理解することを目的に設立された。
- 主な収蔵作家: エコール・ド・パリ(モディリアーニ、シャガール、荻須高德など)、メキシコ・ルネサンス(オロスコ、リベラ、シケイロス、北川民次など)、現代の美術(キーファー、ポロフスキー、荒川修作、河原温など)、郷土の美術(前田青邨、三岸節子など)の4つの柱が収集方針。収蔵作品数は2,120点(1999年度)。
- 常設展: 常設展を重視し、収集の4つの柱に添って、テーマ性を持った展示を目指している。現

在、常設展は、常設展示室1、2および3で行われ、年4回のサイクルで展示替え。

- 特別展(1999年度):  
没後50年 アンソール版画展  
フンデルトワッサー展  
エコール・ド・パリとその時代  
池田遙邨回顧展
- 年間事業費: 2億2,175万円  
(人件費、施設管理費を除いた年間予算)  
教育普及予算: 1,499万円  
(上記年間事業費の内数)
- 総入館者数: 220,811人(1999年度)

#### 3. 教育普及活動導入の背景、経緯

- 学芸全体の方針として、常設展を中心とした活動を展開。その中で、ワークショップ、ガイドツアー、アートカードの貸出しを中心とした教育普及活動も、常設展と結びつけた形で実施している。
- 学芸係は、資料担当と教育担当に分かれている。現在、資料担当は4名で、収集、資料整理、貸し出し業務が中心。教育担当は4名で、主に常設展に教育的な視点を入れた活動を行っており、常設展の企画・運営のほか、講演会・コンサートの企画、ホームページの更新、ビデオ作成、定期的広報、協力会の運営、そして教育普及活動を担当している。
- 他の美術館では、教育普及担当者は孤独な戦いをしているケースも多いようだが、当館では、学芸課長が普及活動に理解があるなど、学芸にうまく溶け込んでいる。
- 教育普及活動の最初の試みとして「夏休み子どものワークシート」を作成した際、まず最初に活動を評価したのが総務課で、翌年からワークショップ等の臨時職員費の予算が認められた。

#### 4. 教育普及活動の内容と運営

##### ◎ 教育普及活動の構成と内容

- 特に特徴的な活動を行っているという意識はない。日常的なことをコンスタントに行うことが普及

活動。

- ワークショップやガイドツアーから構成される『夏休み子どものワークショップ』事業に加え、日常的な教育普及活動として、ガイドボランティアによる常設展案内、「アートカード」の貸出しやガイドボランティアによる常設展案内などの学校との

##### ◎ 主な教育普及事業の概要

事業の名称(開始年度)	事業の内容(実績は1999年度)、課題や今後の展望				
夏休み子どもの美術館 (1991年度)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 子どもを対象とした展示、ガイドツアー、ワークショップを実施する小・中学生を対象とした催し。 <ul style="list-style-type: none"> <li>:「子どもを対象とした展示～夏休み子どもの美術館」:常設展示室にワークショップ関連の作品を展示、低学年用(「このかたちどこにある?」)、高学年用(「描かれた子どもたち」)の2種類のワークシートを準備。</li> <li>:「ガイドツアー」:ガイドボランティアによるツアー。小学4年生～中学生対象。夏休み期間の平日午前10:30～12:00、延べ23回実施。</li> <li>:常設展「名品コレクション」に関連し、「複製/コピー」というテーマで、いずれも型をとる、複製をするといった手法で作品づくりをするワークショップを開催した。講師は美術家の山口百子氏。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• 版であそぶ 森のポートレート(対象:小1～3):樹木のフロタージュやスタンプ</li> <li>• 型をとる1 にせものアイス(対象:小1～3)</li> <li>• 型をとる2 わたしのヌケガラ(小4～中学生)</li> <li>• くりかえす 変わらないわたし/変わっていくわたし(小4～中学生)</li> <li>• 既存のシステムの複写 バーガー”ピジュツカン”(小5～中学生)</li> </ul> </li> </ul> </li> <li>• 美術館における教育普及活動であることを踏まえ、子どもの活動を視野に入れつつ、作家の活動や美術作品をプログラムづくりの根元としている。</li> <li>• 低学年向けの講座の受講希望者の増加とその対応、スタッフ不足、ワークショップの実施場所(専用のスペースがない)が課題。</li> <li>• 将来的には、学校教師が夏休み講座の指導者として参加したり、美術館が教師向けにワークショップを開催するなど、学校と美術館相互に刺激しあえるしくみをつくりたい。</li> </ul>				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模
	小・中学生	延べ209名	年1回	¥400程度	262万円(印刷物、ホスター提出料のみ予算化)

左:アートカード(表)  
右:アートカード(裏)



連携事業、講演会や作品解説講座、ビデオ制作、刊行物の発行(アートペーパー、研究紀要等)、ビデオ上映会なども、美術館の教育普及活動に位置づけられている。

- 「夏休み子どものワークショップ」事業は、常設展を舞台に毎年開催される子ども対象の催しで、2000年度は3つの分野のプログラム(\*表参照)と、関連して「ミュージアム・コンサート」(名古屋フィルメンバーによる子どものためのミュージックワークショップ)を実施した。
- ワークショップへの参加者は、年々増加しており、抽選せざるをえない事業も出てきていることから、本年度から当日受付の簡単なワークショップと、誰でも使える遊び場を用意した。地元のマスコミ等にも取り上げてもらう機会が増え、美術館にとっては、事業に対するいい広報になっている。

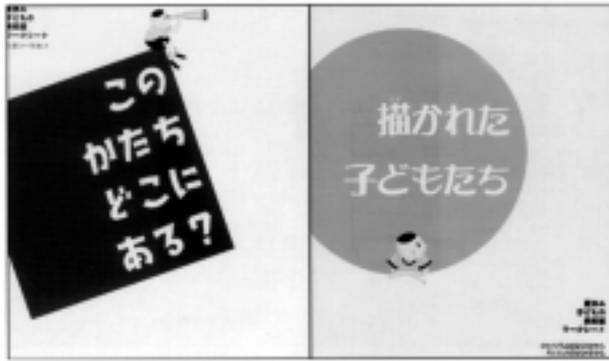
#### ◎ ボランティア制度と常設展ガイドツアー

- 98年度から常設展のガイドツアーにボランティア制度を導入した。元々は、近年のボランティアの活況をみた市からのトップダウンで検討が始まった。当初、展示の監視に導入してはという提案もあったが、作品保持の観点から問題があること、常設展強化の方針があること、「夏休みこどもの美術館」でガイドツアー実施の実績と経験があったことなどから、常設展のガイドツアーとして導入が決定した。
- 常設展で1日2回、午前と午後に時間を決めて実施している。2人1組でメインとサブに役割を分担し、午前と午後で交替するという1日単位の仕事。ボランティアといっても、作品に対する深い理解と解説のテクニックが必要なので、応募時に美術館に対する考えを論文として課し、導入時にはしっかりした研修を行った。
- ガイドツアーの人材育成として、ボランティアの中から意欲のある人を「ミュージアム・ティーチャー」という形で昇格させ、有給スタッフにできる

いかと考えている。学校からガイドツアーへの要請が増えてくればそうした体制づくりが必要。

#### ◎ 学校との連携について

- 最近、学校からの見学ツアーは、隣りが科学館ということもあり、午前中はプラネタリウム、午後は美術館見学といった両施設の抱き合わせで組まれることが多くなった。
- 学校との連携は、94年度の鑑賞授業の立案とワークシート作成への協力依頼から始まった。その後、97年度から熱心な一人の小学校の美術教員から働きかけがあったことで前に進み始めた。
- 学校には、美術館の広報物の送付、校長会でのアピールなど、日常から広報と関係づくりを心がけている。「夏休みこどもの美術館」で、長年の準備が実を結んだという面もある。
- ボランティア制度の導入で受皿ができたことで、学校との連携は増加している。96年:2件、97年:4件、98年:4件、99年:6件、2000年は11月末の予定も含み、すでに10件の実績となっている。
- 今、学校側では、2002年からの指導要領に「鑑賞」授業が含まれることへの対応に苦慮している。学校の先生は、すぐに使えるパッケージ化したものを欲しがっており、何らかの予算がつけば、新しい教材の開発を協働で行える。
- 学校との連携は、ボランティアによるガイドツアーの受け入れと、「アートカード」の貸し出しが柱。アートカードは、常設展の展示作品の紙焼き写真をカード化したもの。作品をよく鑑賞し、興味を持って作品に接する視点を学んでもらうためのツールである。カードにすることで手にとって細かいところまで見ることができし、写真のため、実物とのギャップにも興味を持ってもらえる。
- 現在6組用意して、随時貸し出しをしている。活用の頻度も徐々に増加している。アートカードの存在が口コミで広がっている。



「夏休み子どもの美術館」ワークショップ  
 左:「このかたちどこにある？」  
 (6~8歳)  
 右:「描かれた子どもたち」  
 (一人で読むなら9歳から 大人と読むなら6歳から)

- アートカードの貸し出しをするようになってから、子どもたちは「この絵をみよう」という目的意識を持って来館するので、鑑賞に集中する子どもが増えた。特に、美術に興味がない子どもにとって、アートカードは有効なツールである。
- 学校との連携における第一の課題は、受入れ態勢がシステム化されていないこと。学芸員一人のがんばりでは限界がある。
- 第二は、教育普及活動に使える予算がないこと。アートカードの作成も、館全体の消耗品費等に対応しているのが現状。
- 第三は、ミュージアムティーチャーや若手のアーティスト等、指導者の育成。アーティストと連携できればワークショップの幅が広がる。
- 第四の課題は、スペース。現在、専用の場所がないため展示室で実施しているが、日常的に使用できないし、水場がないため不便。

#### ◎ アーティストとの連携

- 「夏休み子どもの美術館」のワークショップ講師に、アーティストで教育者でもある山口百子氏に講師を依頼している。山口氏との連携で、ワークショップの内容、対象年齢ともに幅が広がった。美術館とアーティストとの関係は、作品にちなんで企画を一緒に作り上げていくという関係であり、おまかせではない。
- 欧米でもアーティストが関与しているワークショップが多いが、残念ながら、わが国では、美術館教育の専門家が少ないのが現状である。社会とアートまたはアーティストを結びつけるということが美術館の役割。アーティストとの関わりを美術館が目に見える形にしていく必要がある。

### 5. 教育普及活動の効果、今後の課題と展望

#### ◎ 教育普及活動の実施に伴う効果

- 東海地区の美術館学芸員と学校の先生と共同

で、教育普及活動と学校との連携を考える「アミューズ・ヴィジョン」研究会を立ち上げ、ワークショップの作成等を開始したことで、美術館に対する外部からの評価も出てきた。

- 10年間行ってきた普及活動を振り返り、それを評価する必要があるが、残念ながら十分にはできていない。
- 現在は、入場者が何人入ったかで評価が決まってしまうが、数字ではない部分で評価されるよう、美術館としての方向性を出す時期にさしかかっている。

#### ◎ 課題と今後の展望

- 美術館は、「美術」というジャンルが、なぜ他の芸術ジャンルの中から選ばれ、自治体の運営による公共施設として存在するのか、ということを見問自答しなければならない。
- 今は、「ただ教育普及をやればいい」という時代は過ぎてしまった。教育普及活動に対する評価を得て、教育担当一人ではなく美術館が組織として取り組んでいけるよう、教育普及をシステム化する必要がある。
- 現在の美術館活動は、特別展、常設展、教育普及の3つに分かれており、それぞれの分野がバラバラのまま事業が行われるなど、1つの美術館として大きなミッションの統一ができていない。そういう意味で、美術館の中で、教育普及の目的を明確にする必要がある。
- 今後の方向性としては、ガイドボランティアを核としたガイド活動の拡充(学校団体の受入れ、特別展のガイド等)と、学校現場との連携強化(学校教員との協力による教材開発等)に力を入れる予定。ただし、学校の美術教育と美術館の美術教育は違うことを認識したうえで、連携を進めなければならない。
- また、従来の一方向的な情報提供ではなく、来館者自身が語り、参加できるしくみづくりも必要。

---

- 具体的には、

現在、常設展にて設置している来館者に作品についての感想を掲示してもらっているコーナー「ここが面白い!？」を発展させ、当館で発行している「ART PAPER(アートペーパー)」にそこに寄せられた感想を掲載し、市民に向けた情報発信をするとともに、美術館ファンを開拓すること

所蔵作品の鑑賞のノウハウを大人向けの講座として立ち上げること

子ども向けのガイドツアーを増やすこと

などが目標。

- 福祉的な部分には、現在は個別対応をしている。92年に、障害を持つ方にも対応した「手でみる美術展」を開催し、視覚障害を持つ方へのガイドツアーも実施した。今後は、福祉的な分野への取組みも前向きに検討すべきだろう。